OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディルタイの記述的分析的心理学における生の構造
Author(s)	大野, 篤一郎
Citation	哲学論叢. 1980, 7, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディルタイの記述的分析的心理学における生の構造

大野篤一郎

一　精神科学の心理学的基礎づけ

ディルタイの哲学上の業績の一つは、自然科学の方法によって、精神科学の客観的妥当性を根拠づけようとする、十九世紀に支配的であった実証主義的傾向に対して、自然科学と精神科学の間に、対象と研究方法に関して、大きな相違があることを指摘し、精神科学の自立性を保つために、新たな基礎づけを試みた点にある。

一八八〇年から一八八三年頃までに執筆され、未完のままに終った、いわゆる『精神科学序論第二巻のためのブレスラウ論稿』[1]（*Breslauer Ausarbeitung zum 2. Band der Einleitung in die Geisteswissenschaften*）においては、ディルタイは、精神科学の認識論を展開しようとした。そこでは、彼は、「すべての対象は、私が関わっている人々も含めて、私の意識の事実としてのみ、私にとって存在する」[2]という「現象性の命題」（der Satz der Phänomenalität）から出発して、この意識の分析を通じて、心的作用の根底に働いている、自己意識の構造を明らかにし、こうして、精神科学の内容をなす内的経験の条件が、自己意識であることを明らかにしようとしている。従って、こ

の未完の草稿では、「精神科学の客観的妥当性の条件」は、カントの認識論に類似した仕方で論じられているということができる。

『精神科学序論』(*Einleitung in die Geisteswissenschaft*)が公刊された三年後の一八八六年、ディルタイが軍医学校の創立記念日に行った『詩的想像力と狂気』[3]と題する講演の中で、彼は、文学者の想像力と、夢・幻覚・狂気との間には親近性があるとする古くからの考え方に対して批判を加え、両者の相違は、前者が「心的生の獲得された連関」(der erworbene Zusammenhang des Seelenlebens)を、正に意識の視点の中にある知覚や表象や状態に作用させる」(VI,92)[4]のに対して、夢や狂気においては、「印象や表象や感情を現実に対して適応させておく調節装置(der regulierende Apparat)が脱落していて、今やイメージは勝手気侭に展開したり、くっついたりしている」(VI,94)点にあると主張する。ここで「印象や表象や感情を現実に適応させておく調節装置」とは、先の引用箇所に出て来る「心的生の獲得された連関」のことである。この概念は、翌一八八七年、『エドゥアルト・ツェラーの第七〇回誕生日に捧げられた哲学論文集』(*Philosophische Aufsätze, Eduard Zeller zum 70 Geburtstag gewidmet.* Leipzig, 1887)に発表され、後、『全集』第六巻に収められた『詩人の想像力――詩学のための寄与』(*Die Einbildungskraft des Dichters. Bausteine für eine Poetik*)や、一八八八年『プロシヤ科学アカデミー集会報告』の中に発表された『普遍妥当な教育学の可能性について』[5] *Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft*)、一八九〇年に書かれた『倫理学体系』[6](*System der Ethik*)、『教育学』[7](*Pädagogik*)の中で言及された後、一八九四年に『プロシヤ科学アカデミー集会報告』として発表された『記述的分析的心理学についての諸想』[8](*Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie*)の中で、ディルタイの構想する記述的

分析的心理学の重要なテーマの一つとして挙げられている。

このことは、一八八七年以後のディルタイは、精神科学を記述的分析的心理学によって基礎づけようとしていたことを示している。そして、このことを最も端的に示しているのは、一八九〇年から九五年までに書かれたと推定されるいわゆる『ベルリン草稿』(*Berliner Entwurf*)である。これは、ゲオルク・ミッシュが命名した通り、文字通りEntwurfに過ぎないのであるが、そこでは、『精神科学序論』の第三篇は「経験科学と認識論の段階、精神科学の今日の問題」と題され、第四篇は、「生、記述的比較的心理学」、第五篇は「認識論の基礎づけ」、第六篇は「知による人間の力とその限界について」と題されている。ここでは注目されるのは、「生」をテーマとする記述的分析的心理学が「認識論の基礎づけ」の前に置かれていることである。このことは、この時期には、ディルタイは認識論の基礎づけに先立って、記述的分析的心理学によって「生」の構造を明らかにしなければならないと考えていたことを示している。実際、『詩人の想像力』、『倫理学体系』、『教育学』などの叙述を読めば、そのいずれにおいても、精粗の違いはあるにせよ、先ず、生の構造についての心理学的人間学的記述と分析が展開されていることは、周知の通りである。

以上のような事情から、ディルタイの哲学の根本概念ともいえる「生」の概念とその構造を『記述的分析的心理学についての諸想』を中心に考察することが、小論の目的である。

二　説明的心理学の批判

この論文の冒頭で、ディルタイは、先ず、説明的心理学と記述的分析的心理学とを区別する。前者は、「心的生の諸現象を、限られた数の一義的に規定された要素を媒介にして、因果関係に従属させる。」(V,139)この目標を達成す

るために、説明的心理学は、多くの仮説(Hypothese)を結びつけなければならない。しかし、このような自然科学の仮説構成的方法を心的生に適用することは、不当であると、ディルタイはいう。意識の中に、外から、現象として、ばらばらに与えられる事実を、その対象とする自然科学とは違って、精神科学[9]においては、事実は、中から、実在として、生きた連関として、根源的に与えられている。自然科学にとっては、自然の連関（因果関係）は、補足する推理（即ち帰納的推理）によって、仮説の結びつきを介して与えられるが、心的生の連関は、根源的に、体験(Erlebnis)において与えられた連関として、精神科学の根底に存している。それ故、「自然をわれわれは説明するが、心的生をわれわれは理解する」(V,144)とディルタイはいう。心的生とその構造連関が理解されるのは、それが前以って体験されているからである。このことから、ディルタイがここで展開しようとしている心理学が、既に一つの解釈学的構造を持っていることが明らかになる。

さて、十九世紀後半、説明的心理学が支配的であることは、ディルタイによれば、精神科学に大きなマイナスの影響を与えている。即ち、精神科学の研究者達は、精神科学を心理学によって基礎づけることを全く断念するか、それとも説明的心理学を我慢して用い、その結果、精神科学そのものにも仮説的性格を持たせるか、どちらかである。

それはまた、精神科学に対してだけでなく、認識論にも大きな影響を与えている。新カント派の哲学者は、認識論を心理学から独立させようとし、認識論を再びカントの先験的方法によって基礎づけようとしている。しかし、ディルタイによれば、「認識論の内容をなす、心的事実は、心的連関の表象という背景なしには、互に結びつけられない。先験的方法という手品は、このそれ自身不可能なことを可能にすることはできない。」(V,149)ディルタイは、カントの批判主義の重要な内容をなす、直観と思惟の分離、認識の形式と内容の分離を批判する。

三　カント認識論の批判

カントは人間認識を成り立たせる二つの認識作用、直観と思惟とを区別する。しかし、ディルタイによれば、カントが直観と呼んでいるもののなかには、既に思惟作用が働いている。ディルタイは、比較・区別・程度を測ること・分離・結合・抽象・捨象などの働きを基本的論理操作(die elementaren logischen Operationen)と呼ぶが、このような働きは、われわれの知覚・想起されたイメージ・幾何学的図形・想像表象などを形成する際に、既に働いていると、ディルタイは考える。そして、この事実を、彼は、「知覚の理知性」(die Intellektualität der Wahrnehmung)と呼んでいる。

カントは更に、形式と内容とを区別しているが、この区別は、ディルタイによれば、「今日もはや堅持されない。」(V,149)むしろ、分離よりも重要なのは、認識の内容としての感覚の多様性と、われわれがこの内容を把握する形式との間に成り立っている内的関係である。彼は、このような、内容と形式との間の内的関係を示すものとして、次のような例を挙げている。「われわれは、同時的な互に異る音を同時に聞き、そして、その音の区別を一つの並存(Nebeneinander)において捉えずに、それらを一つの意識において結びつける。」(V,150)例えば、ドミソの和音を聞く時、われわれは互に異る音を同時に一つの和音として聞くのであって、それを空間的に別々の音として区別するのではない。「これに対して、われわれは、多くの触覚や視覚を、常に一つの並存においてのみ持つことができる。何故なら、われわれは二つの色を一緒に同時に、並存におけるのとは違った仕方で表象することはできないからである。」(ibid)二つの音を同時に一つの音として聞く場合、われわれは、この知覚の内容をその時間的形式から切り離すことはできないし、二つの色はその空間的形式と切り離すことはできない。要するに、感覚の内容と形式とは密接に結びついて

いて、切り離すことはできないと、ディルタイはいうのである。

彼は更に次のような例を挙げている。「単なる内容としての感覚の多様性は、すべての点において、相互の区別、例えば、色の関係や陰影を含んでいる。しかし、これらの区別や度合は、結びつける意識にとってのみ存在する。それ故、内容がありうるためには、形式がなければならないが、それは、形式が現われねばならない場合には、当然内容も存在しなければならないのと同様である。もし、そうでなければ、心的な内容要素がどのようにして、結びつける意識という紐によって、外から結びつけられるのかは、全く理解不可能であろう。」(V,150)

確かに、カントは『純粋理性批判』の「先験的感性論」の初めのところで、「感覚がそこでのみ秩序づけられ、ある形式の中へと置かれるところのものは、それ自身感覚ではありえないから、確かに、一切の現象の内容はアポステリオリにしかわれわれに与えられないが、しかし、現象の形式はすべて、心の中でアプリオリに感覚に対して用意されなければならず、従って、一切の感覚とは切り離して、考察され得なければならぬ」[10]といっている。しかし、ペイトンによれば、この文章から、カントは、われわれが先ず内容を持ってから形式を持つのだとか、逆に先ず形式を持ってから内容を持つのだと主張していると、心理学的に解釈することは誤りである。[11]恐らくディルタイもここでは、カントの形式と内容との区別を先験論理的にではなく、心理学的に解釈したために、このようなカントに対する批判を行ったのだと思われる。

ディルタイは、カントの批判主義を批判して、経験の形式と内容との密接な結びつきを強調したのであるが、そのために彼の認識論は認識論の持つべき形式性を失ってしまっているように思われる。

以上のように、カントの認識論を批判した後で、ディルタイは、認識論と精神科学の根底には、心的連関が置かれ

ねばならず、従って、それを記述し分析する心理学が構想されなければならないと主張する。

四　記述的分析的心理学

ディルタイによれば、記述的分析的心理学は、「すべての発達した人間の心的生の中に斉一的に(gleichförmig)に現われる構成要素や連関を叙述」(V,152)するが、それらの構成要素や連関は、付け加えて考えられたものでも、推論されたものでもなく、体験されるのである。従って、彼の構想する記述的分析的心理学は、先ず根源的に、常に生自身として与えられている一つの連関を記述し、分析するのである。

先に述べたように、説明的心理学は、「内的経験の中に見出される事実を、限られた数の一義的に規定された要素から導き出す。」(V,158)ここでいわれている「限られた数の一義的規定された要素」とは、ディルタイによれば、感覚・表象・快不快の感情であり、更に、これらの要素の間の関係をいい表わす「連合法則」(Assoziationsgesetz)をも含んでいる。このことから、ディルタイが説明的心理学と呼んでいるものは、普通「連想心理学」(Assoziations-psychologie)と呼ばれているものであることが分る。説明的心理学は、精神科学の前提すべき人間本性の全体やその内容的連関を対象としていないが故に、精神科学を基礎づけることはできないと、ディルタイはいう。ディルタイは、「説明的心理学のこれらの限界が、今日よりももっと著しく立ち現われていた時代に、説明的心理学に対して、記述によって心的生の全体とその中に成り立つ連関とを把握し、しかもそれらの形式と共にそれらの内容をも把握するような、内容的心理学(eine Realpsychologie)の概念を対立させた」(V,156)といって、一八六四年に『プロシヤ年報』(*Preußische Jahrbücher*)に掲載された『ノヴァーリス』論文[12]に言及している。このことから、ディルタイが『ノヴ

ァーリス』の中でいっている「内容的心理学」こそ、ここで「記述的心理学」といわれているものを先取していたことが分る。いずれにしても、説明的心理学が批判されるのは、それが、心的生の全体とその内容的連関から出発せず、限られた数の要素から心的現象を説明しようとする点にある。

これに対して、記述的分析的心理学は、先ず、分析的であって、説明的心理学のように構成的であってはならない。それは発達した心的生から出発しなければならないのであって、説明的心理学のように、要素的過程から発達した心的生を導き出してはならない。こうして、記述的心理学が先ず第一に取り扱うのは、心的生の構造連関である。

五　心的生の構造連関

「生」は、ディルタイによれば、先ず、自己(das Selbst)と外界(die Außenwelt)との相互作用(Wechselwirkung)である。このディルタイの考え方から、われわれは、彼における「生」の概念が、デカルトの「精神」のような実体概念ではなくて、関係概念であることを知るのである。ある個体が「生きる」とは、それが外界から身体を介して刺戟を受け取ると同時に、再び身体を介して外界に対して働きかけることを意味しているとすれば、ここで考えられている「生」は、人間にのみ固有のあり方ではなくて、有機体としての生物、特に動物一般のあり方であるとも考えられる。そこから、ディルタイの生、あるいは人間の捉え方が、この時期（一八八七―一八九九）特に生物学主義的であり、従って、それは、人間の社会的歴史的現実を叙述するためのモデルとしては不適当であるという非難がなされたのは当然であるかもしれない。しかし、このように、人間の生を主体と外界との相互作用として捉えること自体が大きな間違いであるとは思えない。しかも、後に明らかになるように、ディルタイのこの時期の「生」の捉え方の中

に、意外にもヘーゲルの客観的精神との親近性があるとすれば、ディルタイの叙述そのものの経験主義的自然主義的性格にも拘らず、全体としては、むしろドイツ観念論の考え方から全く逸脱しているのではないのである。

さて、この自己と外界の相互作用としての生は、ディルタイによれば、先ず、過程(Vorgang)として捉えられる。何故なら、外界との相互作用によって、自己の中に生じる心的状態は、時間の経過に従って変化するからである。このように過程は変易するけれども、しかし、自己と対象的世界との関係は不変であると、ディルタイは考える。何故なら、過程の変化は自己の同一性(Selbigkeit)の意識において結びつけられているからである。換言すれば、心的状態は時間の経過と共に変化するが、にも拘らず、自己がそれらの変化をすべて自分のものであると考えるのは、それらの変化を結びつける自己同一性の意識があるからである。この自己同一性の意識はもはや過程ではなく、しかもすべての過程と結びついている。そうでないとすると、それらの過程がすべて私のものであるといえなくなるであろう。

さて、与えられた瞬間における私の意識の広がりをなすものを、ディルタイは「意識の現状」(Bewußtseinsstand)と呼ぶ。それは、このように充実した生の瞬間の成層(Schichtung)を認識するために、この過程から過程へと移り変る意識の流れを切断することによって可能となる。「私はこれらの瞬間的な意識状態を互に比較することによって、私は、殆んどすべてのこのような意識の現状は、明らかに同時に何らかの表象と感情と意志状態とを含んでいるという結果に到達する。」(V,201)

すべての意識状態は、多かれ少なかれ、表象と感情と意志とを含んでいるということをディルタイはいろいろな例を挙げて説明している。例えば、傷がひりひり痛むというような場合、身体的苦痛は強い不快感以外に、器官感覚をも含んでいるし、また局所限定も含む。「同様にすべての衝動や注意や意志の過程はある表象内容を含む。」(V,202)

ディルタイは、意識の働きをカントの心理学に倣って、表象・感情・意志に三分するが、衝動は、殆んどの場合、感情と一緒にされている。余りはっきりといっていないが、衝動においては、感情と意志とが未分化の状態ではないかと思われる。いずれにしても、ディルタイは、繰り返し、「人間は衝動の束である」といい、また、衝動と感情の束がわれわれの心の構造の中心である」[13]（V,206）といっている。このような人間観は明らかにフロイトの人間観と共通のものである。衝動は感情と同じではないが、すべての衝動の中には暗い感情が働いている、とディルタイはいう。また、意志の働きである注意（Aufmerksamkeit）は、関心（Interesse）に導かれるが、関心は、彼によれば、われわれの自己の状態とその対象との関係とから生じる感情である。表象作用や思考作用の中に感情の興奮があるかどうかを確めることは難しいが、注意深く観察すれば、そのことは立証できる。例えば、様々の色眼鏡を通して景色を眺めると、いろいろな気分が感じられる。

しかし、それにも拘らず、われわれが、われわれの心的状態を感情とか、意志過程とか、表象作用と呼ぶのは何故であろうか。われわれは、心的状態をその都度、その状態の、内的知覚の中に現われる面によっていい表わすが故に、例えば、美しい景色を知覚する場合には、表象作用が支配的である。しかし、もっと詳しく吟味して初めて、ある注意状態が、表象作用と結びついており、全体が深い幸福感に満されているのが分る。

ある状態から他の状態への移行は内的に経験される。心の構造連関をわれわれは直接に体験できる。「われわれがこれらの移り行きを体験するが故に、われわれが、人間的生のすべての情熱や苦痛や運命を含む、この構造連関を覚知するが故に、われわれは人間生活・歴史・人間的なもののすべての深みと深淵とを理解するのである」（V,206）とディルタイはいう。

次に、ディルタイは、「この心的生の、構造を持った連関は、目的論的連関である」(V,207)という。生の充実や衝動の満足や幸福を生ぜしめる傾向を持つ連関は目的連関(der Zweckzusammenhang)である。それどころか、ディルタイによれば、この心的構造においてのみ、合目的性という性格が根源的に与えられている。「われわれが有機体や世界に合目的性を持たせるならば、この概念は内的体験から〔有機体や世界に〕転用されたのである。何故ならば、部分と全体との関係は、その関係の中で実現された価値に基いて、合目的性の性格を受け取るのであるが、この価値は感情生活や衝動生活においてのみ経験されるからである。」(V,207) 換言すれば、部分の全体に対する関係が、内的経験において、快の感情を生ぜしめる時、その関係は合目的的であると判断されるのである。ディルタイのこのような言表はカントの『判断力批判』の中の次のような言葉を思い出させる。「それ故、対象は、その表象が快の感情と結びつけられるが故にのみ、合目的的と呼ばれる。」[14] 後で述べるように、ディルタイにおいても、心的構造連関の合目的性は主観的であるといわれるのは、それが内的経験の中で快の感情と結びついているからである。

晩年の著作『精神科学における歴史的世界の構成』[15] (*Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*)の中では、この部分と全体との関係は合目的性としてではなく、意味(Bedeutung)として捉えられている。[16]

この心的生の構造連関の合目的性から、「発達」(Entwicklung)という生の連関が生じる。これが、記述的心理学が取り扱わねばならぬ第二の連関である。

六　発達

心的生の構造連関が、いわば共時的に、あるいは無時間的に、生の断面を示すのに対して、発達において、心的生の通時的、時間的連関が明らかになる。ディルタイによれば、この二つ、即ち、「構造という連関と発達という連関とは互に制約している。」(V,213)人間の発達は、その生存の広い連関への洞察がなければ、理解できないであろうし、逆に、心的生の発達史的連関は、構造という連関を解明するからである。

「もし構造とそれを動かす力との中に、合目的性がなければ、生の経過(Lebensverlauf)は発達ではないであろう」(V,214)とディルタイはいう。だから、ショーペンハウエルの盲目な意志からも、ヘルバルト主義者や唯物論者の理論による心的諸力の原子論的戯れからも、一人の人間の発達は導き出せないと、ディルタイはいう。心的生の発達概念は、三つの契機を含む、第一は、合目的性、第二は、生の価値、第三の契機は、心的生の分化・構成である。

(1) さて、先に述べた心的生の構造連関の理論から明らかになることは、個体がその下にある外的条件は、それが抑止的なものであれ、促進的なものであれ、常に衝動の充足と幸福の状態とを招き、維持しようとする努力(Streben)を常に生ぜしめるということである。そして「知覚を繊細に発達させ、表象や概念を合目的的に合成し、感情反応の豊かさを増大させ、運動を衝動へと適応させ、都合のよい意志の方向へ馴れ、目的と手段を適切に結びつけることに馴れることによって、衝動の満足や、快的な感情を招き、不快な感情を避けることが容易になる。心的生の構成要素の連関が、このように、生の充実や衝動の満足や幸福に対して影響を及ぼす場合、われわれは、この連関は合目的的であるという。簡単にいえば、心的生の連関が個体の自己保存と種の保存に役立つならば、それは合目的的である。この心的生の構造連関の中にある合目的性を、ディルタイは「主観的内在的合目的性」(die subjektive immanente Zweckwäßigkeit)と呼ぶ。それが主観的であるのは、先に述べたように、内的経験において与えられ、即ち体験さ

れるからであり、内在的であるのは、それが内的経験の外の目的概念に基づけられているのではないからである。

ディルタイによれば、生物学はこの主観的内在的合目的性から客観的内在的合目的性へと移った。この概念は、構造連関の中に置かれた、主観的状態を招くことと、個体や種の保存との関係を考察する場合、仮説によって成立する。換言するならば、ある行為が個体の維持に役立つと考えるのは、それが、われわれの中に快という主観的状態を生ぜしめるからである。従って、ある行為が客観的に合目的的であるというのは、一つの仮説にとどまる。これに対して、ある行為が主観的に合目的的であるかどうかは、快不快の感情によって直ちに決定される。

(2) こうして、心的生の連関の概念は、「生の価値」(der Wert des Lebens) と最も密接に関係する。「何故なら、この生の価値は、心的現実がその表現を感情の中に見出す限り、心的現実の中にあるからである。」(V,216)更に、その訳は、感情において体験されたもののみが、われわれにとって価値があるからである。従って価値は感情とは切り離すことができない。しかし、そうだからといって、価値は感情から成り立つのではない。むしろ、われわれが経験する、生の充実、われわれが感じる生の現実の豊かさ、われわれの中にあるものを充分に享受すること、それが、われわれには、われわれの生活の価値であると思われるのである。健全な人間には、生の現実全体がその価値に従って、感情において評価されるのである。換言すれば、あるものが、われわれにとって価値があるならば、それは感情によって評価されるのであって、逆ではないというのである。

こうして、ディルタイは、心的構造連関が合目的的である理由を、それが生の諸価値を展開し、堅持し、高める傾向を持つことに見出す。

(3) 更に、このように「生の諸価値の産出及び維持、有害なものの排除の中に現われている、生の連関の合目的性は、

個人の置かれている諸条件の影響下で、心的生の増大する分化・構成[17](eine zunehmende Artikulation des Seelenlebens)を生ぜしめる。これが、発達の連関に含まれる第三の契機である。

外界の刺戟による印象は、衝動や感情によって評価されるが、それは生存の条件に対する支配を可能にするためである。この印象に対して感情が関与することによって、関心や注意が印象に向けられ、役に立つ知覚像が成立し、外的条件を評価可能な仕方で表出する類型的表象が形成され、外界における類似性や因果性についての観念が展開される。

更に、いろいろな経験は、青年に生の諸価値をより正しく評価することを教える。そして、価値規定を明確に関係づけることによって、個体性(Individualität)の深みから来る人生の理想の統一が生じる。しかし、青年の人生の理想と未来の夢とは、困難な戦いの中で、事態の力に適応させられる。

こうして、自分がもはや生み出すことを欲せず、僅かに自分の分担において促進しようとする現実の価値連関を認めることによって、成熟した人間は、青年の一面的な主観性を乗り越える。そしてまた、それによって、成熟した人間は、現実の価値連関の中に、青年期の理想の中の真理が含まれていることを見出すが故に、青年期の理想が没落したという憂愁から解放される。こうして、この人生の頂点で、衝動と感情の分化・構成も完成する。こうして、心的生の分化・構成の結果として、「心的生の獲得された連関」(der erworbene Zusawwenhang des Seelenlebens)が成り立つ。

七　心的生の獲得された連関

ディルタイによれば、性格とか人格とか普通いわれるものは、この「心的生の獲得された連関」の一部に過ぎない。それは、ディルタイの叙述から明らかなように、習慣（ἔθος）によって形成された性格（ἦθος）を含んでいると思われる。

更に、この概念は、ディルタイの生の哲学の中では、先験的統覚が、カントの先験哲学の中で果したのと同じ役割を果している。ディルタイは次のようにいう。「人格性というこの内的形成に対して、先験哲学は条件を探す。先ず、われわれの中のこの綜合的能力の一つの条件が、意識の統一という定式の中に含まれる。しかし、先験哲学はもっと深く掘り下げる。そして最後に、ヨーロッパ的思考における先験哲学の異常な力は、その諸定式が抽象的な形で、綜合的なもの、自発的に形成するもの、統覚の先験的綜合を、性格、天才、英雄を理解不可能にしてしまうところの、経験論的な寄せ集めとしての心に、対立させたという点に基いている。」（V,221）しかし、先験哲学の欠点は、それが創造性を、抽象的に知的過程の中に見出し、それから、その過程とは全く切り離して、人間性の他の側面（例えば感情や意志）を分析した点にある。これに対して、ディルタイの記述的分析的心理学は、既に見たように、心的生の構造連関から出発するのである。

先に述べたように、「心的生の獲得された連関」は、ディルタイの叙述から明らかなように、先ず、個人の中で、習慣によって形成された性格を含んでいる。それでは、この連関は、意識の内部に生じる変化にどのように作用するのであろうか。ディルタイによれば、この連関の中で習慣化された現実の像は、現にわれわれの意識をわずらわせている印象の理解をコントロールしているし、また、そこで習慣化されている価値評価の仕方は、瞬間の感情を規定している。また、その連関の中で習慣化された、われわれの意志の目的や、目的の相互関係や、その目的のために必要な

手段などの体系は、瞬間の激情をコントロールする。(Ⅵ,168) そしてまた、彼によれば、意識の中の変化に、この連関が働きかけることこそ、心的生の非常に困難で、非常に高度な機能である。

この心的生の働きをディルタイは大脳生理学的に説明しようとしている。即ち、この働きは、大脳の機能の非常に大きなエネルギーと健康とを要求する。大脳の灰白質には、表象とその結合とを再生するための諸条件が集められている。大脳の非常に大きなエネルギーのみが、最も離れた表象が接触し、利用されるように、この装置全体の巾広い活動を可能にすることができる。ディルタイによれば、「天才性の働きと、強力な心の自己コントロールの基礎とは、この連関に基いている。骨の折れる仕事の中で、この連関全体が、長く深く興奮させられた後で、大脳が休む丁度その時に、突然この獲得された連関の深みから、創造的な結合がとび出す。」(Ⅵ,168)ディルタイは、このように、文学者や芸術家の創造の秘密を、「心的生の獲得された連関」の中に見出すのである。[18]

更に、彼は、この「獲得された連関」は、差し当り先ず、発達した人間において与えられているが、「しかし、それは全体としては意識されていないから、先ず間接的に、個々の再生された部分、あるいは心的過程への働きの中で、われわれにとって把握可能となる」(Ⅴ,181)という。ここで、彼が、表明的ではないが、直接に体験されなくても、生の客観化は理解可能であるという、晩年の思想を既に抱懐していたことが明らかになる。「天才的人間の作品の中で、われわれは、一定の形式の精神的活動の働きを研究できるだけでない。言語、神話、宗教的習俗、道徳、法、外的組織の中にも全精神の所産が存在している。そして、それらの所産の中で、ヘーゲルと共に語るならば、人間の意識が客観的になっていて、分析に充分堪えるのである。……心的連関の成立、その形式と働きについての洞察を得ようとする、この人間精神の所産の分析は、しかし、この連関が形成された歴史的過程の、すべてのつかむことのできる部

分の観察と蒐集とを、歴史の所産の分析と結びつけなければならない。」(V,180)　ヨーアッハが指摘しているように、[19] これは、ディルタイがヘーゲルの客観的精神の概念をはっきりと取り上げた初めての箇所である。そしてまた、この文章からも、先に述べたように、ディルタイの記述的心理学が、晩年の『精神科学における歴史的世界の構成』[20]と多くの点で連関していることが明らかになる。

八　結び

以上、われわれは、ディルタイの一八九四年の論文『記述的分析的心理学についての諸想』を中心にして、ディルタイ哲学の中心概念である「生」の構造を明らかにしようと努めた。そして、われわれは、ディルタイが先ず、生を、個体と環境との相互作用と捉え、しかも、その構造連関の中に合目的性を見出すことによって、生の発達の連関を明らかにすることができ、最後に、発達の結果として心的生の獲得された連関を成立させることによって、先験哲学の自己意識に代る、心的生のコントロール装置を見出したこと、そして更に、心的生の獲得された連関が、歴史との関係において、個人の精神を超えた、客観的精神であると考えられるに到ったことを明らかにした。

この、個体と環境との相互作用として捉えられた生が、心的生の獲得された連関を介して、どうして、ヘーゲルの客観的精神に近づくことができたのかという問いには、ディルタイ自身の叙述からだけでは充分に答えられないように思われる。何故、このようなことが可能であったのかを理解するためには、われわれは、この一見、極めて生物学的心理学的に記述され分析されている「生」が、実は根本において、反省構造を持っているということに注目しなければならないであろう。このことを最も端的に語っているのは、「生はここで（追体験あるいは覚知において）生を

捉える」(Ⅶ,136) というディルタイの言葉である。この意味において、ヨーアッハのいうように、「ディルタイの生の概念は、もし、人間が社会と歴史についての科学の中で、自分自身の働きを再認識するという原則を観念論的といいたいならば、観念論的である。しかし、彼の生の概念は同時に、このことによって、必要な方法を用いる経験的研究の詳細さが排除されるのでない限り、実証主義的である」[21]といってよいであろう。

注

(1)ディルタイの弟子であったベルンハルト・グレートゥイゼンの手になるタイプ原稿が、現在、東ベルリンのドイツ民主主義共和国科学アカデミーの文書館と西ドイツのゲッチンゲン大学図書館手稿部に、一部づつ保存されている。現在、西ドイツ・ボーフムにあるルール大学哲学研究室のフリチョフ・ロディ教授の手で、後述の『ベルリン草稿』(*Berliner Entwurf zum 2. Band der Einleitung in die Geisteswissenschaften*)と共に、『ディルタイ全集』の第十九巻として刊行の準備がされている。これらの手稿の閲覧と手稿からの引用を許可された、ロディ教授の御好意に深く感謝の意を表したい。

(2)*Breslauer Ausarbeitung. S.1.* ページ付はグレートゥイゼンのタイプ原稿のページ付による。

(3)後に『ディルタイ全集』(Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften.* 18 Bde. Stuttgart u. Göttingen, 1956—1977)の第六巻九〇—一〇二ページに収載。

(4)ローマ数字は、前注に挙げた『全集』の巻数を表わし、アラビア数字はページ数を表わす。

(5)現在、『全集』第六巻五六—八二ページに収載。

(6)『全集』第十巻所収。

(7)『全集』第九巻所収。

(8)『全集』第五巻一三九—二四〇ページ。

(9)精神科学とディルタイが総称しているのは、具体的には、歴史、経済学、法律学、国家学、宗教学、文学、芸術学、音楽学、哲学、心理学を含んでいる。

(10) K.d.r.V.(A,20)

(11) Paton, H.J., *Kant's Metaphysic of Experience.* 2 Vols. London & New York. 1970. Vol. I, p.138. 参照

(12) 現在は『体験と文学』(*Das Erlebnis und die Dichtung.* 6. Aufl. Leipzig u. Berlin, 1919) に収められている。

(13) (X,50) 等

(14) Kant, I., *Kritik der Urteilskraft.* (Philosophische Bibliothek.) Hamburg, 1954. S. 27f.

(15)『全集』第七巻

(16)『全集』第七巻二三二ページ以下参照

(17) Artikulationを分化・構成と訳した。他の箇所ではGliederungという語が用いられている。こう訳した根拠は、『全集』第七巻二二七ページに見出される、ディルタイの次のような説明にある。「私はこのArtikulationという概念を用いて、生きた連関が一切の発達・発展の基礎であり、すべての分化(Differenzierung)や、より明確で、より繊細な関係は、丁度胎児から一匹の動物の構造が発達するように、この構造から発達することを表現する。」(傍点は筆者による)。

(18) 創造・創作の源泉が、このように、作家の「心的生の獲得された連関」にあるとするディルタイの考え方は、後の文芸学では殆んど顧られなかったと、カロル・ザウアーラントは指摘している。(Vgl. Karol Sauerland, *Diltheys Erlebnisbegriff. Entstehung, Glanzzeit und Verkümmerung eines literaturhistorischen Begriffs.* Berlin. New York, 1972. S 95) そして、その理由は、今日では、人間が最も稀れにしか矛盾のない、それ自身で完結した人格性を持たない点にあるといっている。「心的生の獲得された連関」について語る時、ディルタイが念頭においていた作家の一人は恐らくゲーテであり、もう一人はレッシングである。

(19) Johach, H., *Handelnder Mensch und objektiver Geist. Zur Theorie der Geistes-und Sozialwissenschaften bei Wilhelm Dilthey.* Meisenheim am Glan, 1974. S.112.

(20)『全集』第七巻七九―一八八ページに収載。

(21) Johach, S.113f.

(神戸女学院大学教授)